

カインはどのようにして「神のように」振る舞うことになったのか
(創世記 4,1-16 「カインとアベル」のエピソード)

— 気まぐれな神と、神的に気まぐれなカイン —

加藤 隆

Comment Caïn est-il arrivé à se comporter comme Dieu se comporte ?
(Gn4,1-16 Episode de “Caïn et Abel”)

--- Dieu capricieux et Caïn capricieux à la façon de Dieu ---

Takashi KATO

目次

創世記 4,1-16 テキスト

文脈の中での「カインとアベル」のエピソードのつながりの悪さ
独立した物語としての「カインとアベル」のエピソードについての作業仮説

アベル

神とカイン

結論

創世記 4,1-16 テキスト

参考までに、KJV の英語訳を添えた。日本語訳は加藤によるもの。

1:הָאָדָם יָדַע אֶת-חַוָּה אִשְׁתּוֹ וַתַּהַר וַתֵּלֶד אֶת-קַיִן וַיֹּאמֶר קַיִן אֶת-יְהוָה אֵלֵי

1 Adam δὲ ἔγνω Εὐαν τὴν γυναῖκα αὐτοῦ, καὶ συλλαβοῦσα ἔτεκεν τὸν Καὶν καὶ εἶπεν Ἐκτεσάμην ἄνθρωπον διὰ τοῦ θεοῦ.

1 And Adam knew Eve his wife; and she conceived, and bare Cain, and said, I have gotten a man from the LORD.

1 そしてアダムは、彼の妻エバを知った。そして彼女は、身ごもってカインを産んだ、そして言った、「わたしはヤーヴェによって男を得た」。

*「わたしはヤーヴェによって男を得た」。エバのこの言葉の意味は、議論されている。動詞「カーナー」は、「買う」「手に入れる」「(神が) 創る」といった意味。名詞「イーシュ」は、「男」あるいは「夫」が普通の意味。「息子」(自分の子で、男の子) という意味ではない。「ヤーヴェによって」と訳したテキストの前置詞「アト」は、どのような意味かはっきりしない。普通は、動詞の目的語を示す。したがって「ヤー

ヴェを」の意味が頭に浮かぶ。その他、「ヤーヴェと共にあって」「ヤーヴェと同様に」の意味ではないかという提案がある。LXXでは「διὰ τοῦ θεοῦ」となっていて、「神を通して」といった意味だと言える。次のような訳が可能なのかもしれない。(順不同)

1) 「ヤーヴェ同様、わたしはひとりの男性を創った」。(エバは、「人を産む」ことで、「人を創る」という神の業に匹敵する行為を行った。彼女は彼女なりに、自分が「神のよう」であることを実現した。)

2) 「わたしは夫としてヤーヴェを得た」。(子ができることは、神の働きであり、神を夫として得たことだと考えられる。)

3) 「わたしはヤーヴェによって夫を得た」。(神の働きを通して子が生まれ、アダムが「夫」として確かなものになった。)

4) 「わたしはヤーヴェによって男を得た」。(この「男」は、生まれたカイン。子が生まれたのは神の働き。)(この訳を上を私訳に示したが、他に比べてこれが優先するのではない。)

5) 「わたしはヤーヴェのしるしをもつ男を得た」。(「ヤーヴェと共に」が「男」にかかると考えて、「ヤーヴェと共にある男」といった意味とする。)

(以上の整理については、特に月本、p.139-140を参照した。)

どの解釈が適切かは決められないようである。しかし、少なくとも、生まれてきたカインに関連して、ヤーヴェとの何らかの肯定的なつながりがあることが明示的に確認されていることははっきりしている。アベルについて、神とのこうした関係が何も指摘されていないことと対照的である。

2: וַתִּבְרָא אֶת-אָחִיו אֶת-הָאֵלֹהִים אֶת-אָבֶל רֵעֵהּ אֵין וְקַיִן הָיָה עֹבֵד אֲדָמָה׃

2 καὶ προσέθηκεν τεκεῖν τὸν ἀδελφὸν αὐτοῦ τὸν Ἀβελ. καὶ ἐγένετο Ἀβελ ποιμὴν προβάτων, Καὶν δὲ ἦν ἐργαζόμενος τὴν γῆν.

2 And she again bare his brother Abel. And Abel was a keeper of sheep, but Cain was a tiller of the ground.

2 彼女はまた、彼の弟アベルを産んだ。そしてアベルは羊を飼う者となり、そしてカインは土を耕す者となった。

* 「兄弟」「アーハ」は、兄か弟がの区別がない単語。以下も「弟」と訳す。

3: וְהָיָה מִקֵּץ יָמִים וַיָּבֵא קַיִן מִפְּרִי הָאֲדָמָה מִנְחָה לַיהוָה׃

3 καὶ ἐγένετο μεθ' ἡμέρας ἤνεγκεν Καὶν ἀπὸ τῶν καρπῶν τῆς γῆς θυσίαν τῷ κυρίῳ,

3 And in process of time it came to pass, that Cain brought of the fruit of the ground an offering unto the LORD.

3 そして時の流れの中で、カインは土の実りを献げ物としてヤーヴェのもとに持って来た。

4: וְהָאֵלֹהִים גָּם-הוּא מִבְּכֹרוֹת צֹאן וּמִחֲלִבָּהּ וַיִּשַׁע יְהוָה אֶל-הָאֵלֹהִים אֶת-אֲבֶל וְאֶת-מִנְחָתוֹ׃

4 καὶ Ἀβελ ἤνεγκεν καὶ αὐτὸς ἀπὸ τῶν πρωτοτόκων τῶν προβάτων αὐτοῦ καὶ ἀπὸ τῶν στεάτων αὐτῶν. καὶ ἐπείδεν ὁ θεὸς ἐπὶ Ἀβελ καὶ ἐπὶ τοῖς δώροις αὐτοῦ,

4 And Abel, he also brought of the firstlings of his flock and of the fat thereof. And the LORD had respect unto Abel and to his offering:

4 そしてアベルもまた、彼の群れの初子たちと、その脂肪部分を持って来た。そしてヤーヴェは、アベルと彼の献げ物に目を留めた。

5: אֶל-קַיִן וְאֶל-מִנְחָתוֹ, אֵשׁ לֹא הָיָה לְקַיִן לְמַדּוּתוֹ וְלֹא פָנָיו:

5 ἐπὶ δὲ Καὶν καὶ ἐπὶ ταῖς θυσίαις αὐτοῦ οὐ προσέσχεν. καὶ ἐλύπησεν τὸν Καὶν λίαν, καὶ συνέπεσεν τῷ προσώπῳ.

5 But unto Cain and to his offering he had not respect. And Cain was very wroth, and his countenance fell.

5 そしてカインと彼の献げ物には、彼（ヤーヴェ）は目を留めなかった。カインは激しく怒り、顔を伏せた。

* 「顔を伏せる」。動詞「ナファル」פָּלַךְは「(下に) 落ちる」の意。直訳なら「彼の顔が落ちた」。

6: וַיֹּאמֶר יְהוָה אֶל-קַיִן לָמָּה חָרָה לָךְ וְלָמָּה נָפְלוּ פָנֶיךָ:

6 καὶ εἶπεν κύριος ὁ θεὸς τῷ Καὶν Ἵνα τί περιλύπος ἐγένου, καὶ ἵνα τί συνέπεσεν τὸ πρόσωπόν σου;

6 And the LORD said unto Cain, Why art thou wroth? and why is thy countenance fallen?

6 そしてヤーヴェはカインに言った。「お前は、なぜ、怒っているのか。お前は、なぜ、顔を伏せるのか」。

7: הֲוֹ אִם-תֵּיטִיב בְּשִׂאת וְאִם, אֵת יִיטִיב לְפָתַח חַטָּאת רָבָץ וְאֵלֶּי תִשְׁוֹקְתוּ וְאִתָּה תִמְשַׁל-בּוֹ:

7 οὐκ, ἐὰν ὀρθῶς προσενέγκῃς, ὀρθῶς δὲ μὴ διέλης, ἡμαρτες; ἡσύχασον πρὸς σὲ ἢ ἀποστροφή αὐτοῦ, καὶ σὺ ἄρξεις αὐτοῦ.

7 If thou doest well, shalt thou not be accepted? and if thou doest not well, sin lieth at the door. And unto thee shall be his desire, and thou shalt rule over him.

7 もしお前が良く行ったなら、お前は堂々としているところではないか。もしお前が良く行っていないなら、戸口で罪（？）が構えている。そして、それが求めるところは、お前だ。そしてお前は、それを制さねばならない」。

7 LXX（以下のように）ではないか、もしお前がきちんと持ってきて（献げて）、しかしきちんと分けていなかったなら、お前は罪を犯した。静かにしていろ（伏せろ（？））。お前のところに、その逸脱（ἡ ἀποστροφή αὐτοῦ 「罪」のこと？）（がある）。そしてお前は、それを支配するだろう。

* <前半> 「良く行ろ」。「ヤタブ」は動詞。／「堂々としている」。動詞「スエート」שָׁעַת (「ナーサー」שָׁעַרの不定形)。「上げる」「膨らむ」といった意味。直前の「顔を伏せる」に呼応して、「顔を上げる」といったように「顔を」を補って訳出されることが多いようだが、この動詞には目的語は記されていない。そこで、目的語がないことを尊重して「堂々としている」という訳文にした。／「戸口で罪が構えている」。「戸口で」は比喩と思われるが、何をたとえているのかははっきり確定できない。いずれにしても、カインに関わることであることは、確かだろう。／「罪が構えている」。男性分詞「ローベツ」は「構えている」「待ち伏せている」と言った意味。テキストの流れでは、主語は「罪」「ハッタート」であるのが自然だが、「ハッタート」は女性名詞。文法的には、「罪」「ハッタート」が「ローベツ」「構えている」「待ち伏せている」

の主語であるのはおかしい。不注意でこのように記してしまった、という可能性はある。「罪が構えている」という意味は、とにかくも読み取れる。不注意でないなら、どのような意図があったと考えるべきだろう。この部分（「罪が構えている」という部分、あるいは6-7節の神の言葉の全体、が、それほど重要でないことを示唆するものなのかもしれない。さらにうがった見方をするなら、「文法などにとらわれずに語っても、神が語るなら問題ない」ということを示しているのかもしれない。

* <後半> 「それが求めるところは、お前だ」。「トゥシュカト」は「欲望」（英語なら、*desire*）にあたる。「その欲望が、お前を対象にしている」といった意味。「それ」は男性形。直前の男性分詞「ローベツ」「構えている」「待ち伏せている」の主語にあたると思うのが自然。「戸口に構えているもの」の「欲望が、お前を対象にしている」というイメージもすんなり理解できる。しかし「戸口に構えているもの」が女性名詞「罪」「ハッタート」だとすると、それを男性形の代名詞で受けていることになる。それでもここでは「罪の欲望が、お前を対象にしている」と理解してしまうことが多い。そうでないなら、この「それ」は、アベルだという解釈が提案されている。

7b 節は、3,16 b の女に対する神の言葉と、似ている。

3,16b : אֱלֹהִים יְשׁוּבָהּ וְהוּא יִמְשֵׁלְךָ

4,7b אֱלֹהִים יְשׁוּבָהּ וְהוּא יִמְשֵׁלְךָ

3,16b そして、お前が求めるところは、お前の夫だ。そして彼は、お前を制するだろう。

4,7b そして、それが求めるところは、お前だ。そしてお前は、それを制さねばならない。

3,16 では、エバがアダムを求め、アダムがエバを支配する。男女関係の一つの可能性として、比較的容易に理解できる。男が女を支配するのであって、女が男を支配するのではない。

4,7 でも、カインが支配するべきだとされている。支配の対象は、「罪」（あるいは「アベル」）である。支配の対象を確定はできないが、いずれにしても、神が定めた構図であると主張されているかのようである。そしてカインは、「支配する」ということを実行できたのだと考えるべきである。

* LXX の文は、我々の手元にあるヘブライ語テキストにない要素が多い。／ヘブライ語の「もしお前が良く行ったなら」に対応しているのが、ἐὰν ὀρθῶς προσενέγκῃς 「もしお前がきちんと持ってきて」。προσφέρω (<προσενέγκῃς) は、単に「もって来る」のではなく、「(献げ物を) もって来る」という意味合いが強い語で、カインとアベルが献げ物を行ったことからの付加だと思われる。「良い」ということが、ヘブライ語テキストでは限定がなく、カインの存在全体に関わり得る広がりがあるのに、LXX は献げ物に関連するものとして意味を限定してしまっている。／LXX では、「(献げ物を) きちんと持ってきて、(それなのに) きちんと分けていなかったなら、お前は罪を犯した」となっていて、ヘブライ語の「戸口で罪が構えている」という表現が取り換えられている。「切り分ける」の διέλις は、διαίρω aorist2, subj.2sg。献げ物のテーマが継続していると考えられる。しかし「切り分ける」「裂く」という行為は、カインが畑の産物を献げ物にしたことに適合しない(月本、p.146)。カインがすでに罪の状態にあって(「罪を犯した」)、「カインは悪玉」とあるとして、それは「献げ物」に問題があったからという解釈を押し通そうとして、苦しまぎれに付加した表現だろうか。／LXX では、「カインは悪玉」とされてしまっていて、この観点からエピソードの全体を読まざるを得なくなっている。LXX だけを読んでいる読者は、ヘブライ語テキストの意味が分からなくなってしまうのは、このためだと考えられる。

וַיְדַבֵּר קַיִן אֶל-אָבֶל אָחִיו וַיְהִי בְהֵיטֵם בְּשׂוּבָהּ יְקָם קַיִן אֶל-הַבַּיְתָּה אֶחָיו וַיְהִי בְהֵיטֵם בְּשׂוּבָהּ יְקָם קַיִן אֶל-הַבַּיְתָּה אֶחָיו

8 καὶ εἶπεν Καὶν πρὸς Ἀβελ τὸν ἀδελφὸν αὐτοῦ Διέλθωμεν εἰς τὸ πεδῖον. καὶ ἐγένετο ἐν τῷ εἶναι αὐτοὺς ἐν τῷ πεδίῳ καὶ ἀνέστη Καὶν ἐπὶ Ἀβελ τὸν ἀδελφὸν αὐτοῦ καὶ ἀπέκτεινεν αὐτόν.

8 And Cain talked with Abel his brother: and it came to pass, when they were in the

field, that Cain rose up against Abel his brother, and slew him.

8 そしてカインは、彼の弟アベルと話をした。そして彼らが野原にいたとき、カインは彼の弟アベルを襲って殺した。

* 「カインは、彼の弟アベルと話をした」を訳した個所は、「カインは、彼の弟アベルに言った（ワヨメル）」と訳せる。しかしヘブライ語テキストでは、カインが何を言ったのか記されていない。LXX では、「Διέλθωμεν εἰς τὸ πεδῖον」が付加されていて、「野に行こう」という言葉を言ったことになっている。

9: וַיֹּאמֶר יְהוָה אֶל-קַיִן אַי הֲבֵל אָחִיךָ וַיֹּאמֶר אֵי יְעִתִּי הַשָּׂמֶר אָחִי אֲנִי׃

9 καὶ εἶπεν ὁ θεὸς πρὸς Καὶν Ποῦ ἐστὶν Ἀβελ ὁ ἀδελφός σου; ὁ δὲ εἶπεν Οὐ γινώσκω μὴ φύλαξ τοῦ ἀδελφοῦ μου εἰμι ἐγώ;

9 And the LORD said unto Cain, Where is Abel thy brother? And he said, I know not: Am I my brother's keeper?

9 そしてヤーヴェはカインに言った。「お前の弟アベルは、どこか。」カインは答えた。「私は知らない。私は弟の番人か」。

10: וַיֹּאמֶר מַה עָשִׂיתָ קוֹל דְּמֵי אָחִיךָ צֹעֲקִים אֵלַי מִן-הָאֲדָמָה׃

10 καὶ εἶπεν ὁ θεὸς Τί ἐποίησας; φωνὴ αἵματος τοῦ ἀδελφοῦ σου βοᾷ πρὸς με ἐκ τῆς γῆς.

10 And he said, What hast thou done? the voice of thy brother's blood crieth unto me from the ground.

10 そして彼（＝ヤーヴェ）は言った。「お前は何をしたのか。声がする。お前の弟の血が土の中からわたしに向かって叫んでいる。

* ヘブライ語テキストでは、「声」は単数、「血」は複数。「叫んでいる」は複数分詞。したがって LXX のように「叫んでいる」の主語を「声」とすることはできない。

11: וְעַתָּה אָרוּר אַתָּה מִן-הָאֲדָמָה אֲשֶׁר פָּצְתָהּ אֶת-פִּיהָ לְקַחַת אֶת-דַּמִּי אָחִיךָ מִיָּד׃

11 καὶ νῦν ἐπικατάρατος σὺ ἀπὸ τῆς γῆς, ἣ ἔχλαεν τὸ στόμα αὐτῆς δέξασθαι τὸ αἷμα τοῦ ἀδελφοῦ σου ἐκ τῆς χειρός σου.

11 And now art thou cursed from the earth, which hath opened her mouth to receive thy brother's blood from thy hand;

11 そして今、お前は土から呪われる者である。（その土は）お前の弟の血を受けるためにその口を開いた。

12: כִּי תַעֲבֹד אֶת-הָאֲדָמָה, אֲ-תִתֶּנָּה לְךָ גֵּעַ וְגַד תִּהְיֶה בְּאָרְךָ׃

12 ὅτι ἐργᾷ τὴν γῆν, καὶ οὐ προσθήσει τὴν ἰσχύν αὐτῆς δοῦναί σοι: στένων καὶ τρέμων ἔσῃ ἐπὶ τῆς γῆς.

12 When thou tillest the ground, it shall not henceforth yield unto thee her strength; a

fugitive and a vagabond shalt thou be in the earth.

12 お前が土を耕す時、それ（＝土）は、これ以後、お前のためにその力を与えない。お前は、地において、さまよい、さすらう」。

13 וַיֹּאמֶר קַיִן אֶל־יְהוָה גְּדוֹל עוֹנִי מִנְּשֹׂא:

13 και εἶπεν Καὶν πρὸς τὸν κύριον Μείζων ἢ αἰτία μου τοῦ ἀφεθῆναί με·

13 And Cain said unto the LORD, My punishment is greater than I can bear.

13 そしてカインはヤーヴェに言った。「わたしの罰は、耐えるのにはあまり大きい。

* 「罰」。「アヴォン *u 1 i 1*」は、「罪」という意味と、「罪に対する罰」という意味のどちらも可。ここでは直前にヤーヴェがカインへの罰についての述べているので、「罰」と訳すべき。

14 הִן גִּרְשֶׁתְּ אֹתִי הַיּוֹם מֵעַל פְּנֵי הָאֲדָמָה וּמִפְּנֵי אֶפְסֹתַי וְהָיִיתִי נֹדֵד בְּאֶרֶץ וְהָיָה כָּל־מֹצְאִי יַהַרְגֵנִי:

14 εἰ ἐκβάλλεις με σήμερον ἀπὸ προσώπου τῆς γῆς καὶ ἀπὸ τοῦ προσώπου σου κρυβήσομαι, καὶ ἔσομαι στένων καὶ τρέμων ἐπὶ τῆς γῆς, καὶ ἔσται πᾶς ὁ εὐρίσκων με ἀποκτενεῖ με.

14 Behold, thou hast driven me out this day from the face of the earth; and from thy face shall I be hid; and I shall be a fugitive and a vagabond in the earth; and it shall come to pass, that every one that findeth me shall slay me.

14 見よ。この日（今日）、あなたは私を、地の表から追放した。そして、あなたの顔から、私は隠されるだろう。そして私は、地において、さまよい、さすらうだろう。そして、私に出会う者はすべての者が、私を殺すだろう」。

15 וַיֹּאמֶר יְהוָה לְכֹן כָּל־הַרְגֵי קַיִן שִׁבְעָתַיִם יָקָם וַיִּשֶׂם יְהוָה לְקַיִן אוֹת לְבִלְתִּי הַכּוֹת־אֹתוֹ כָּל־מֹצְאֵוֹ:

15 και εἶπεν αὐτῷ κύριος ὁ θεός Οὐχ οὕτως· πᾶς ὁ ἀποκτείνας Καὶν ἑπτὰ ἐκδικούμενα παραλύσει. καὶ ἔθετο κύριος ὁ θεός σημεῖον τῷ Καὶν τοῦ μὴ ἀνελεῖν αὐτὸν πάντα τὸν εὐρίσκοντα αὐτόν.

15 And the LORD said unto him, Therefore whosoever slayeth Cain, vengeance shall be taken on him sevenfold. And the LORD set a mark upon Cain, lest any finding him should kill him.

15 そしてヤーヴェはカインに言った。「だから、カインを殺す者は誰でも、七倍の復讐を受けるだろう」。そしてヤーヴェは、カインにしるしを付けた、彼を見つける者が誰でも彼を殺すことがないように。

* 「だから……」は、ヘブライ語の「ラケン」の訳。「それゆえに」といった意味。カインの言葉の内容を認めた上での対応になっている。LXX では、「そのようではない」といった意味の表現になっていて、カインの言葉の内容を退けている。どちらでも、対話の流れの大筋は、同一だと言える。

16 וַיֵּצֵא קַיִן מִלְּפָנֵי יְהוָה וַיִּשָּׁב בְּאֶרֶץ־נֹדֵד קִדְמֹת־עֵדֵן:

16 ἐξῆλθεν δὲ Καὶν ἀπὸ προσώπου τοῦ θεοῦ καὶ ὤκησεν ἐν γῆ Ναιθ κατέναντι Ἐδεμ.

16 And Cain went out from the presence of the LORD, and dwelt in the land of Nod, on the east of Eden.

16 そしてカインは、主の前を去り、そして彼は、エデンの東、ノドに住んだ。

* 「ノド」。LXX では「ナイド Ναιθ」。ここで言及されている以外の言及はない。12 節・14 節で「さすらう」と訳した「ヌド」（「私はさすらうだろう」ならば「ワナド」）になぞらえて案出した地名か、といった指摘がなされている。（TOBAT, p.51）

創世記 4 章（全 26 節）には、「カインとアベル」関連のテキストが記されている。

この「カインとアベル」関連のテキストは、三つの部分からなっている。

4,1-15 「カインとアベル」のエピソード

4,17-24 カインの系図

4,25-26 セトの誕生とその子についての指摘

文脈の中での「カインとアベル」のエピソードのつながりの悪さ

創世記 4 章の冒頭に記されている「カインとアベル」のエピソードを、創世記の物語の流れの中で読んで、筋が通るものとしていくらかでも厳密に理解しようとする、文脈の中で「カインとアベル」のエピソードのつながりが悪いことに気づかざるをえない。

「つながりが悪い」とは、「つながり」があるようであって、しかしそのことを前提とすると、その「つながり」がうまく成立しないということである。

< 「つながり」があるように思われる >

1) 創世記 1 - 3 章の二つの物語（「六日間の天地創造」「エデンの園」）の後に、「カインとアベル」のエピソードが記されている。先行する二つの物語に示された内容が前提とされていて、その上で「カインとアベル」のエピソードを理解すべきであるような体裁になっている。

2) 「カインとアベル」のエピソードの冒頭に、アダムとエバが登場する。この二人は「エデンの園」の物語に登場していた。「エデンの園」の物語で語られた出来事を前提とした上で、「カインとアベル」のエピソードでは二人のその後の様子が語られていると理解することになる。「カインとアベル」がアダムとエバの子だとされていることが、もっともはっきりしたつながりを作っている。

「つながり」を示す要素としては、この2つが決定的だろう。その他に、次の点も指摘できる。

3) 神(「ヤーヴェ」)が登場して、それなりの役を演じている。これは先行する「六日間の天地創造」「エデンの園」にも認められた様子である。

<「つながり」の悪さ>

1) 最初の人(アダムとエバ)とする(ただし、これは、「エデンの園」の話に従った見方でしかない)。とにかくそのような前提で考えるならば、「エデンの園」のエピソードが終わり、「カインとアベル」のエピソードが始まったところでは、世界にはアダムとエバしかいないことになる。そしてこの二人からカインとアベルが生まれる。アベルは殺されるので、三人が残ることになる。

ところが「カインとアベル」のエピソードの後の「カインの系図」の冒頭(17節)で、「カインは妻を知った」とされている。

この女性は、どのようにして存在しているのか。

人がまだ存在しない時に、神がアダムを作った。エバも、人間の両親から生まれたのではない。神が作った。

このアダムとエバ以外は、人は人間の両親から生まれているようである。創世記のこの後の物語では系図がかなり頻繁に記されているが、系図なるものが成り立つということでも典型的に示されているように、人は人から生まれるというのでしかないかのごとくである。

なのに、この女性が存在している。「この女性は実は神が作ったのだが、テキストには記されていない」という可能性は否定できない。しかし、人が人から生まれるのではなく、神によって作られるということはかなり例外的なことなのだから、そのことが記されて然るべきではないだろうか。

この女性は、神によって直接に作られたのではないのに存在している、と考えるべきである雰囲気(トーン)が濃厚である。とすると、世界にはアダムとエバ、カインとアベルがいて、そしてアベル以外の三人だけがいることになったというイメージと辻褄が合わない。

世界にはアダムとエバ、カインしかいない、という前提であくまで考えようとするならば、たとえば、存在している三人のうち女性はエバだけだから、この「妻」はエバだという可能性が考えられる。カインは母親を妻にしたことになる。

このように考えるならば、三人しかいないという状況で、カインが妻をもつ、ということが合理化できる。

しかし、カインの妻の問題をかなり無理をしてこのように辻褄を合わせても、更に大きな問題がある。17節の後半では、カインが町を建てたとされている。物語の記述をそのまま読んでみると、カインの周りにはカインの家族しか存在しないと思われる(カイン、カ

インの妻、カインの子であるエノク)。「町を建てた」とされているのだから、このような人数しか人間がいなかったとされていると考えるのはきわめて困難である。

また「カインとアベル」のエピソードの中で、追放されることになったカインが、「自分は殺される」と恐れている(14節)。この段階では、カイン以外にはアダムとエバしかいないのだからということで、カインが恐れているのは獣などに襲われることだといったことも想像されているようである。しかし、ここではやはり、カインとその両親以外の人間のことカインによって考えられているとすべき雰囲気が濃厚である。

また、カインが特別な存在であることが分かるように、神がカインに「しるし」をつける場面がある。「彼を見つける者が誰でも彼を殺すことがないように」ということが、この「しるし」付与の目的とされている(15節)。ここでも、カインとその両親以外の人間がいると前提されているようである。

カインの妻になった女性の問題、町の住人の問題、カインを襲うかもしれない者の問題、カインに与えられる「しるし」の問題、があることは、「カインとアベル」のエピソードのところでは、アダムとエバ、そしてカインとアベルしかいなかったと思われる面があることと、整合的ではない。

ここで、創世記の物語にしたがうならば「最初の人アダムとエバだ」とは言い切れないことを、簡単に指摘しておく。

創世記1-3章には、二つの物語がある。「六日間の天地創造」と「エデンの園」である。どちらにおいても、人間の創造が物語られている。アダム、エバ、という名のついた人間が作られるのは、「エデンの園」の物語においてである。アダムが作られ、それからひとしきりの経緯があつてエバが作られる。

ところが「六日間の天地創造」の物語では、男女は同時に、一挙に、作られている。人間の創造の様子が明らかに異なっている。「六日間の天地創造」の物語で作られる男女が、アダムとエバだ、とは言ふことはできない。

「六日間の天地創造」と「エデンの園」の物語は、別々の二つの物語である。

人の創造に関する明らかな相違点は、他にもある。

「エデンの園」の冒頭の創造物語では、人が作られ、その時には植物がなかったとわざわざ確認され、そして人の創造の後に植物が作られたとされている。ところが「六日間の天地創造」では、人が作られたのは六日目であり、創造の作業の最後の出来事とされている。植物は、人の創造よりも先に作られている。¹

いずれにせよ、「最初の人アダムとエバだ」というのは、きわめて広範にそして根強く人々の頭に植え付けられている常識になってしまっているが、聖書冒頭の記述では、そのような単純なことは主張されていない。

¹ この問題については、5章のアダムの系図の冒頭の記述のことも考慮しなければならない。しかし、ここでは詳述しない。

「カインとアベル」のエピソードの「つながり」の悪さについては、その他にも、問題がある。

2) 「カインとアベル」のエピソードでは、冒頭にアダムが登場する。アダムは、エデンの園から追放された直後という雰囲気である。

ところで、エデンの園の外側でアダムが何をするかについては、エデンの園のエピソードの末尾、アダムがまさに追放される際の神の言葉があつて、すでに定められている。

土を耕す、ということになっている (3,23)。

アダムが土を耕す者であることは、エデンの園の物語の他の個所にも記されている。

2,15。アダムは、創造されたばかりで、まだ何の活動もしていないかと思われる存在だったが (8節)、ここ 15 節で、土を耕すことになっている。

3,17-19。アダムに対する神の呪いの言葉でも、「土が呪われるものとなった」などとされていて、アダムが土を耕す者とされている可能性が大きい。

「カインとアベル」のエピソードでアダムが言及されているが、「土を耕す」ということをアダムが行っているかどうかについては、まったく触れられていない。その後のテキストでも、このことについての確認されていない。

そして彼の二人の子について、

(弟の) アベルは羊を飼う者

(兄の) カインは土を耕す者

だとされている (2節)。

エデンの園からの追放直前に神によって定められたことなのだから、エデンの園の外でアダムが「土を耕す」のは当然だとしてしまえる余地は十分にある。しかし、エデンの園の物語でかなり強調されたことであるのに、実際にエデンの園の外に出てから、土を耕すアダムの姿がないのは、どこかしら欠如があるような雰囲気があるのも確かである。

アダムの二人の子のうち、兄であるカインは、「土を耕す者」とされている。カインはアダムの子であり、アダムは「土を耕す者」になると神によって定められたのだから、アダムの子も「土を耕す者」となるのという論理が働いているのかもしれないと、念頭に浮かぶ。

しかし親の活動を子が引き継ぐというのなら、アベルが「羊を飼う者」になっているのは、この原則からはずれたことである。

また「羊を飼う」という活動は、創世記のここまでの物語ではまったく言及されなかった活動である。

エデンの園の物語でアダムが「土を耕す者」とされていたが、これは字面どおりに「土を耕す」という活動のことだけを指すと考えるのではなく、人間が生き延びるためにやらねばならない活動の全般が「土を耕す」という表現で示されている、そこにはたとえば「羊

を飼う」という活動も含意されていると、考えることは不可能ではない。これは好意的な解釈である。

古代文明においては、人間は「土を耕す」という活動だけをしていただけではなく、他にさまざまな活動をしていた。それらの活動のすべてを網羅的に列挙することはできない。「羊を飼う」という活動は、「土を耕す」という活動に並ぶ重要な人間の活動である。この二つを並べることは、「土を耕す」という一つの項目だけで示された人間活動全般を、少し詳しくして二つの項目で示すものになっている、というようにも考えられる²。これも、もう一つの好意的解釈である。

このように考えるならば、「羊を飼う」という活動がまったく言及されていなかったのに、「カインとアベル」のエピソードで突然に言及されていることは、大きな問題ではなくなる。創世記冒頭の通常の読書では、このような好意的解釈で、特に問題ないとして読み進むのではないだろうか。

しかし整合的に読もうとするとかなりの好意的解釈が必要な書き方がされていることは確かであって、こうした読み方がテキストの本当の理解として適切かどうかについては、疑わしさが残る。

3)「カインとアベル」のエピソードでは、神と二人の兄弟との間に実際の交わりがある。このことも奇妙である。

まず、「エデンの園」のエピソードとの関連で考える。

直前の「エデンの園」のエピソードでは、アダムが園の外に追放されたとされている。神は園の内にとどまれていると考えられる。神が園の内において、アダムが園の外にいる状態になって、神とアダムの断絶が生じている。園からのアダムの追放は、神との断絶を、空間的イメージで表現したものとなっているように思われる。

ところが、その直後の「カインとアベル」のエピソードでは、園の外側にいるはずのカインとアベルに、神が積極的に介入している。

アダムが園から追放されて、カインとアベルはその子なのだから、彼らはやはり園の外側にいると考えるべきである。彼らがエデンの園に戻ったという記述はないし、「エデンの園」のエピソードの末尾では、アダムや、ひいてはその他の人間たちが、園に戻れないようにするためにかなり厳重な措置がとられているようである。

「エデンの園」のエピソードによれば、神は園の内に残っているようである。しかし神には不思議な能力——ここでは、園の内においても、園の外の状況に介入できる能力——があってもおかしくはないので、園の外にいる人間に介入することがあっても不都合ではな

² 次のように指摘されたりしている。「牧羊と農耕とは古代西アジアにおける基本的な2つの生活様式であった。」(月本昭男、『創世記1』リーフ・バイブル・コンメンタリーシリーズ、日本基督教団出版局、1996、p.140)

い、と見なせるのは確かである。

このように考えるならば、「エデンの園」のエピソードとの関連では、「カインとアベル」のエピソードで神と二人の兄弟との間に実際の交わりがあることは、特別に奇妙なことではない。

しかし、「六日間の創造」のエピソードとの問題がある。このエピソードにおいて、神は六日間にわたって創造の業を行い、七日目に「休んだ」とされている。ところが、「エデンの園」のエピソードでは、神はいろいろと活動している。「カインとアベル」のエピソードでも神は、いろいろと活動している。神は休んでいない。

「神は休んだ」という言明の問題は、「エデンの園」のエピソード、「カインとアベル」のエピソードとの関連だけの問題ではなく、聖書の物語にだけ関心を限定したとしても、その聖書の物語において神があれこれと活動している記述のすべてとの関連の問題である。神が休んでいるとされていることは、神が活動しているという記述とは相容れない。このことは、「六日間の創造」のエピソードが、表面的には世界の初めの出来事を語っているかのようだが、実はそうではない、ということを示唆する装置になっているのかもしれない。

4) 「カインとアベル」のエピソードでは、カインが追放されることになる。エピソードの末尾で「カインは、主の前を去り、そして彼は、エデンの東、ノドに住んだ」とされている(16節)。

「エデンの園」のエピソードの末尾では、アダムが追放され、「エデンの東」に置かれた、とされている。「エデンの園」のエピソードに続いて読むと、「カインとアベル」のエピソードの場所設定は、「エデンの東」ではないかと考えてしまう。

ところが、「カインとアベル」のエピソードの末尾によれば、「エデンの東」は、追放されたカインが行く場所になっている。

この問題を、どのように理解すればよいのか。「エデンの園」のエピソードの末尾でアダムは、「エデンの東」に置かれた。しかしアダムは、他の場所に移ったのだ、といった具合に考えることになるのだろうか。しかし、こうしたことはテキストに記されていない。

5) 「エデンの園」のエピソードの末尾では、アダムだけが追放されたとされている。

ところが「カインとアベル」のエピソードの冒頭では、エバがアダムといっしょにいる。アダムだけが追放されたように記されていたのだが、エバも追放されたような雰囲気である。

エバはアダムのパートナーなので、アダムだけが追放されたようでも、それでもエバがアダムと一緒になのはあり得ることだ、と考えることは可能である。

ここでも好意的解釈をしなければならぬ。釈然としないところが残る。

先行する二つのエピソードの流れとの「つながり」があるという前提で「カインとアベ

ル」のエピソードを読もうとすると、いくつもの重大な「つながりの悪さ」があることに気づかざるを得ない。

整合的なつながりがある物語であるというようにいざないながら、そのような方針で読み進め、理解を進めることがあまりに困難であるように、叙述が行われている。

どのように対処すべきだろうか。

第一に、創世記冒頭以降の物語を、問題なくつながりがある物語だ、整合的な流れにおいて語られている物語だ、とするのは誤りだと認めねばならない。

第二に、それぞれのエピソードは、別々のエピソードだと考えて、それぞれの意味を探らねばならない。

第三に、そのような別々のエピソードが、つながりがあるかのように記されている意味を探る。

次のようなたとえが可能かもしれない。いくつもの絵が順番に並べられている。ストーリーのあるマンガのようなものならば、絵の並び順はきわめて重要である。ストーリーを理解して、並べられた絵の全体、そして個々の絵の意味を理解する。

普通の展覧会のような場合でも、一応のところ絵が並べられている。テーマに共通なところがあるから、素材に共通なところがあるから、技法が似ているから、製作年代順、といった一応の基準があるかもしれない。一つの展覧会でも、一つの基準が貫かれているとは限らない。ある並びでは、テーマに共通なところがあるからというので並んでいても、別の並びでは、技法が似ているというので並べられたりする。絵の並び順から考えられる意味らしきものにあまりに強く拘束されると、個々の絵の意味や価値の重要なところを見失うかもしれない。

創世記冒頭から11章までの物語は「原初史」というようによく呼ばれている（英、*primeval history*）。世界ないし人類の原初のことが語られているというとらえ方である。大昔の人と思われる者たちの系図などがあちこちに配されていて、この印象が強められている。しかし、この表面的な体裁にとらわれ過ぎると、個々のエピソードの重要な意味を見失ってしまうかもしれない。

独立した物語としての「カインとアベル」のエピソードについての作業仮説

独立した物語としての「カインとアベル」のエピソードがどのようなもので、そこにどのような意義があるかについて考えるには、まず、聖書本文のテキストのどの部分が、本来の独立した物語には余計なものかを、ある程度見きわめねばならない。蓋然性の高い部分を見分けるという作業なので、確実な結果が得られるとは主張できないが、必要な作業である。

しかし、ここでは独立した物語としての「カインとアベル」のエピソードがどのようなものかについて、結論的なイメージを作業仮説として示すという手順で議論する。

この物語の骨格となっているのは、神との間に問題が生じた者が、神によって追放される、というストーリーである。

この点では、「エデンの園」の物語と「カインとアベル」の物語は、大きな筋においてかなり似たものとなっている。

アダムの場合、知恵の木の実を食べたことが問題になり、追放された。カインの場合、アベル殺害が問題になり、追放された。

「エデンの園」の物語の場合、人間が知恵を身につけ、「神のよう」になったことが、問題の本質である。

この物語は、具体的には、まずはソロモン批判だと考えられる。ソロモンはことさらに「知恵者」とされる者である。ともかくも王国を成立させたダビデ王のあとを受けて、王国を発展させた。「ソロモンの栄華」などと言われる。

しかし国の繁栄は、国民にとっては重い負担になった。ソロモンへの不満が高まる。ソロモンの死後王国が南北に分裂したことは、国民の不満が大きかったことを如実に物語っている。

王国が繁栄したのは、ソロモンの手腕によるところが大きかったようである。ソロモンが優れた王で、王の支配権が堅固なものになったからである。ソロモンは「神のよう」になって、支配を固め、国を繁栄に導いた。

王の支配権が強くなるとは、王の判断や命令の力が徹底するということである。王が「神のよう」になった。これは、神の支配が退けられることでもある。

人間が知恵をもち、「神のよう」になる、そのために、国民にとって重い負担が生じた。

人々は「土を耕す」ということをしていた。これは王の命令ではなく、いわば神の命令に従ったことだった。人々の生活は、調和的なものだった。

ところが、人が知恵を獲得する。すると「土を耕す」ということが、苦しい作業になった。神との断絶も生じる。それが「追放」という形で表現されている。

「知恵の獲得」「神との断絶」というモチーフにおいては、人間一般の人間存在そのものにかかわることとしてではなく、知恵の能力で神に代わって命令する「王」になるような者の出現の問題がまずは扱われていると考えるべきである。

いわゆる「原初史」の他のエピソードにおいても、まずはソロモン、あるいは王制の出現、の問題が扱われていると考えるべきである。

「バベルの塔」の物語では、「塔」は神殿のことであり、ソロモンの権力を表現するものである。多言語の問題は、ソロモンの王国が（ダビデ以来）軍事的・政治的に拡大して、

支配下が多言語状況になったという問題を反映している。

ノアのエピソードは、基本的にはソロモン支配の賛美だと考えられる。箱舟は、神殿である。これもソロモンの権力を表現するものである。大きな危機があっても、ソロモンの事業によって救いが実現するとされているかのようである。

結論的なことを述べてしまうならば、「カインとアベル」のエピソードは、ソロモンだけが念頭にあるのではなく、王制の出現全体が念頭にある、と考えられる。しかし物語が成立したのは、「エデンの園」の物語が成立したのと同時代（ソロモンの時代、あるいは王国分裂の直後あたり）だろう。

ソロモンの時代に、ソロモンないし王制の問題を直接に扱うのは、はばかられる雰囲気があったのではないかと想像される。ソロモンについて否定的な見方を示そうとする場合には、なおさらである。こうした「政治的に危ないテーマ」を扱う際には、たとえ話が用いられることが、いくらか流行していたのではないだろうか。どことも知れない場所、はるかに遠い場所でのことだったり、誰ともわからない者が活動したりするが、実は何のことを言っているのかが分かるのがたとえ話である。

独立した物語としての「カインとアベル」の話も、こうした雰囲気の中で成立したたとえ話だったと考えられる。神との間に問題が生じた者が、神によって追放される、というたとえ話が少なくとも二つ作られた。それぞれをベースにしたエピソードが創世記では並べて記された。

独立した物語としての「カインとアベル」に、後から付加されたと考えられる点を、すでにいくらか指摘しておく。独立した物語の解釈を大きく歪めてしまいそうな点だけを、まずは指摘する。

1節. カインとアベルの両親がアダムとエバだという主張は、編集上の設定である。エデンの園のエピソードにつなげる際に、このような設定が導入された、と考えられる。カインとアベルが原初史時代の者たちだと印象づける機能をもつ設定だが、それ以外に、「カインとアベル」の話の内容にとって、彼らの両親がアダムとエバであることは、必要不可欠ではない。

2-3節. カインとアベルが「土を耕す者」「羊を飼う者」とされているのは本来ではない、とみなすべきである。神によって無視される者と認められる者という区別が二人に設けられることは、物語にとって必要である。しかしこの二人の相違が、二人のこのような二種類の職業的活動にどうしても結び付けられねばならないのではない。

実際、アベルが羊を飼う者であることは、その後の兄弟の対立に特別な意味をもっていない。

カインが「土を耕す者」とされている点は、いくらか微妙である。この設定は、エデン

の園のエピソードでアダムが「土を耕す者」とされていることに由来した編集上の付加である可能性が大きいと思われる。アダムが「土を耕す者」であることは、エデンの園の物語の核となった物語にとって本来的だったと思われる。しかしカインは、どうしても「土を耕す者」でなければならなかったのか。この問題は微妙なので、改めて検討する（本論文の末尾「結論」を見よ）。

いずれにしても、創世記のテキストになる時には、カインが「土を耕す者」なので、その対照でアベルが「羊を飼う者」とされたのだろう。

16節。カインの追放の場所が「エデンの東」とされている。これも編集句かもしれない。しかし「エデンの園」の名は元からあったかもしれない。「追放」ということになると、行先は「エデンの東」という決まりきった呼応があたのかもしれない。

「エデンの東」が編集句であって、創世記のテキストとして並べられる時に付加されたのだとすると、「エデンの園」のエピソードの末尾との関連で齟齬が生じるのに、あえてそのような付加が行われたということになる。つまり、「カインとアベル」のエピソードが、「エデンの園」のエピソードのからのストーリーの続きではないことを示唆する手段の一つとしてこのような操作が行われたことになる。こうした場合も、不可能ではない。

「エデンの東」の言及の有無は、独立した物語としての「カインとアベル」の理解を大きく左右するものではない。

アベル

創世記のテキストによれば、カインとアベルがそれぞれ、一見したところ同じような捧げものをしたのだが、神はアベルの捧げものには好意的に反応し、カインの捧げものについては無視したような態度を示した。

しかしアベルは、ほどなく殺されてしまう。

多くの注釈では、アベルは善玉、カインは悪玉、ということが当然であるかのように議論が進められてしまっている。そして神の動き方については、ほとんど注意が向けられていない。アベルが殺されてしまうことについては、アベルの運命を嘆くようなコメントがつけられたりすることが多い。しかしアベルは善であって正しい、といった方向の位置付けで済ましてしまっても良いのだろうか。

アベルの捧げものが神に認められたようになっている。これはアベルが、神との関連で良好な位置づけにあると考えてよい出来事である。しかしアベルは、殺されてしまう。

殺されることが良いのかどうか、正しいのかどうかは、簡単には断定できない。人間的な普通の判断では、殺されることは好ましくないことだと、まずは考えられる。しかし人間的な自然な判断が、適切かどうかは分からない。

このエピソードでは、殺人のテーマが二度にわたって扱われている。アベルが殺されたことが一つ。それからカインが、自分が殺されるのかもしれないと恐れていることが、も

う一つ。カインがこの恐れを神に表明すると、神はカインが殺されないようにするための処置を講じる。この様子を見ると、このエピソードでも、殺されることは、常識的に感じられるのと同様に、好ましくないこととされているようである。とするならばアベルが簡単に殺されてしまうことは、好ましくないことと考えてよいことになる。

殺されることはアベルにとっても好ましくないことであるはずなのに、神はアベルを守っていない。

捧げものについては神は、アベルに好意的であるようだが、アベルが殺されることについては、神はアベルを守らない。

また、アベルの血が叫ぶということが、神によって確認されている。殺されることが好ましくないのだから、死んでしまっていることも好ましくないと、考えてよいだろう。神は神なのだから、たとえば、アベルを甦らせることもできそうだが、死んだアベルはそのままに放置される。

カインの場合、献げものに関しては神に無視されたようだが、カインが殺されるかもしれないことについては、かなり手厚い保護策を神は講じて、物語から知られる範囲内では、カインは殺されなかったようである。

人に対する好意の有無と、それに見合った処置に関して、神には、人間的な観点からは、一貫性がない、ということになる。

好意を示したはずの者に、神は、続けて好意的に働きかけていない。

好意を示すのを避けたようであった者に、神は、好意的な面がある働きかけを行う。

人間的な見方からは、神は気まぐれである、神は中途半端である、ということになる。

問題は、カインやアベルが正しいかどうか、ではない。カインやアベルが様々な観点からどのようにであれ、神は、それぞれに好意的になったりならなかったりする。

たとえば、アベルが正しい、としてみよう。神は、アベルが正しいから、アベルの捧げものに関して、アベルに好意的になったのだろうか。アベルが正しいから、神が好意的になる、という因果関係があるのだろうか。

アベルが正しいとして、その正しさに変化があったと考えられるような示唆は、テキストには何も記されていない。アベルは変わっていない。それなのに神は、アベルを見捨てている。

アベルが正しいなら、アベルはずっと正しかった。そして神は、アベルに好意的になったり、アベルを見捨てたりする。神の態度は、アベルの「正しい」という位置づけに左右されていない。

「正しい」という語を神についてあえて用いるならば、神が正しい、のである。神の態度は、それが神の態度であるので、人間的基準からはどのように思われようとも、場合に

よっては「正しくない」と思われるような態度が含まれていても、「すべて正しい」ということになる。

「選び」という言葉も、ここでの様子を叙述するのに使えるかもしれない。神はアベルの捧げものに好意的であることを選んだ。アベルが殺されることについては、アベルを見捨てることを選んだ。神の側からの選びについて、人間の側からはいろいろな判断や評価がなされてしまうだろう。しかし、それらの人間的評価や判断の基準が、神を動かしているのではない。

こうしたことが了解されていないために、「なぜ神は、アベルの捧げものだけに目を留めたのか」という問題が、この物語の理解においてきわめて重要な問題であるかのような様相になってしまっている。一応のところ学問的手続きを踏んで検討しているように見える注釈者も、必ずしも例外ではない。

せつかくの機会なのでこの議論の様子を整理しておく。

比較的最近の日本語の注釈書で、この問題についての先行する議論を整理したものがある。月本昭男氏の注釈書である（1996）³。これに助けをもらいながら整理する。

1) 捧げものに優劣があった、という解釈。二種類ある。一つは、動物の捧げものは植物の捧げものに優る、とする。もう一つは、カインは「土の実り」をささげたが、アベルは「初子」「脂肪」を持って来て、つまり最上のものをささげた。

2) カインとアベルの人物そのものに優越があった。

この二方向の基準が、神の選択の基準だったと確定できる表現は、テキストには記されていない。テキストに示されていない判断基準を、読み手が勝手にあてはめてみようとしているだけで、適切な解釈ではない。

この二方向の解釈は、広い意味での「正しい」という基準によるものと言うことができる。第一の「捧げものに優劣」は、つまるところ、カインとアベルが、捧げものの選択において正しかったどうか問題になっている。第二のものは、人物そのものの「正しさ」が、問題になっている。

新約聖書に示された「解釈」は影響が大きい。

<マタイ 23,35>

こうして、地に流された正しい血はすべて、あなたたちにかかってくる、**正しいアベルの血**から、バラキアスの子ザカリアスの血に至るまで……

ὅπως ἔλθῃ ἐφ' ὑμᾶς πᾶν αἷμα δίκαιον ἐκχυνόμενον ἐπὶ τῆς γῆς ἀπὸ τοῦ αἵματος Ἀβελ τοῦ δικαίου ἕως τοῦ αἵματος Ζαχαρίου υἱοῦ Βαραχίου ...

「ザカリアス」については形容詞がなく単に「ザカリアス」という名が記されているだけだが、「アベル」については「正しいアベル」とされている。

³月本昭男、『創世記 I』リーフ・バイブル・コメンタリーシリーズ、日本基督教団、1996、p.142-3。

<ルカ 11,51>

アベルの血から、祭壇と家の間で殺されたザカリアスの血まで……

ἀπὸ αἵματος Ἀβελ ἕως αἵματος Ζαχαρίου …

上に示したマタイ 23,35 の並行箇所。「アベル」には「正しい」という形容詞がない。しかし、イエスの批判の対象であり、否定的に位置づけられているユダヤ教指導者たちとの対比において、アベルが肯定的に位置づけられるべき者（文脈では「預言者」）の例になっていることは確かである。したがってアベルが「正しい」とされているという点について、マタイの場合と同様だと見なすことができる。

<ヘブライ書 11,4>

信仰によって、アベルはカインより優れたいけにえを神に献げ、それにより、神が彼の献げ物を認めて、彼は正しい者であると証明された。それにより、アベルは、死んでも、まだ語っている。

Πίστει πλείονα θυσίαν Ἀβελ παρά Κάϊν προσήνεγκεν τῷ θεῷ, δι' ἧς ἐμαρτυρήθη εἶναι δίκαιος, μαρτυροῦντος ἐπὶ τοῖς δώροις αὐτοῦ τοῦ θεοῦ, καὶ δι' αὐτῆς ἀποθανῶν ἔτι λαλεῖ.

ヘブライ書 11 章では、「信仰」（ピステイス）において優れた者たちについての言及が、列挙されている。アベルも「信仰」をもっていて、それが「カインより優れた」捧げものに表現された。ここでの「信仰」（ピステイス）なるものがどのようなものなのかを、厳密かつ正確に見定めることは難しいが、人間の側に備わっているとされていることは確実である。アベルが優越していることに神が素直に対応するのが当然だとされている。アベルが殺されたことについても言及されているが、アベルが殺されないように神が措置を講じなかったという問題は、避けられている。

キリスト教の周辺では、こうした「アベルは正しい」という「解釈」ないし「見方」が常識的になってしまっていて今に及んでいる。新約聖書のテキストに示されたこうした「解釈」ないし「見方」がかなり大きく与っていると考えられる。しかし「新約聖書における旧約聖書の解釈」は、旧約聖書のテキストの解釈として適切とは限らない。アベルの位置づけは、そうした場合の例になっている。

3) 神による選択がそのようなものだったので、そのようになった。

結局のところ、これが正解である。

月本氏は、この場合についても言及している。しかし、こうした見方を退けている。月本氏は、次のように述べている。

少なくともこの物語は、人間の想いの及ばない神の選びを主題にしていない。もしそうだとすれば、選びに与ったアベルが選びに与らなかったカインに殺害されることになるが、そのような事態は、後の「苦難の僕」にも似た代替死の観念（イザ 53 章 8）を前提にしなければ成立し難いだろう。しかし、物語にはそういった思想を読み込む手がかりはない。（p.143）

「人間の想いの及ばない神の選び」という点に気づいているのに、あと一步のところ、適切な議論ができていない。「選びに与ったアベルが選びに与らなかったカインに殺害される」という問題にも気づいている。しかし、この「アベル殺害」の出来事は、何らかの合理的な論理、人間が納得できる論理、つまり「人間の想いが及ぶ」ところの論理で説明できなければならない、と考えてしまっている。「苦難の僕」のことなどが検討されるが、月本氏自身が確認しているように、「物語にはそういった思想を読み込む手がかりはない」。

捧げものに関しての「アベルの選び」は、「人間の想いの及ばない神の選び」である。そして「アベル殺害」の出来事も、もう一つの「人間の想いの及ばない神の選び」である。「アベルは神によって選ばれたのだから、殺害されるはずはない、神が守るはずだ」というのが、「人間の想いが及ぶ」ところの範囲である。「神がひとたび選んだら、その対象に（人間が都合よく考えるように）忠実でなければならない」「（この場合は）アベルが殺されないように神がアベルを守るのが当然だ」という、人間が納得し易い論理が背後にある。しかし、神は、そのような論理に従わねばならないのではない。「人間の想いの及ばない」ように、神が選びを行うことも十分にあり得る。「アベル殺害」は、その恰好の出来事になっている。

神とカイン

カインについては、彼がいかに悪い者なのかを指摘することに、多くの注釈者の関心が縛られてしまうようである。

問題が生じて、神とカインの間にいくらかのやり取りがなされ、結局のところカインは追放される。

しかしカインには、神の保護が与えられるという面がある。カインは全面的に否定的に扱われていない。

また、カインに関心が集中してしまうためか、神の様子については注釈者の関心が薄いようである。カインとの相互作用の中での神の対応の様子も、物語の重要な要素であり、注目しなければならない。

<「捧げもの」の出来事>

二種類の捧げものうち、アベルの捧げものだけに「神が目を留めた」と記されている。「捧げものに神が目を留める」ということが具体的にどのようなことであり、そのことが人間にどのようにして了解できるのかは、不思議なことであって、いろいろと議論されている。

しかし、ここでは、この問題に立ち入らない。カインとアベルのうち、アベルについてだけ神が好意を示したとされていること、に注目する。神との関連で、カインとアベルについて、肯定されるアベルと否定されるカインがいるという状況が生じたこと、を確認する。

この状況が生じるにあたって、創世記のテキストでは、「捧げものがなされる」「その捧げものが認められたり、認められなかったりする」という出来事が契機になっているが、「捧げもの」のテーマは、物語のこれ以降の展開に何の役割もはたしていない。

「神との関連で、カインとアベルについて、肯定されるアベルと否定されるカインがいるという状況が生じた」、このことが重要であり、それがどんな契機で生じたかはそれほど重要ではない。「捧げもの」関連の出来事がきっかけでなくても、他の何かの出来事がきっかけでも、構わない。きっかけとなりそうなさまざまな出来事のどれを物語で用いてもよいのだが、どれかでなくてはならず、創世記のテキストでは、ある意味でたまたま、「捧げもの」関連の出来事が生じたことになっていると考えるべきである。

<カインとアベルは兄弟?>

カインとアベルは兄弟だということは、元の物語の要素だったのか、元の物語にとって不可欠の要素だったのか、という問題がある。

二人が兄弟だということは、アダムとエバが彼らの両親で、アダムとエバから二人が生まれた、ということに依拠している。

しかし物語のこれ以降の展開では、二人が兄弟でなければならない、とは言い切れない。創世記のテキストの比較的短い物語の中で、「アベル」について「彼(=カイン)の兄弟」と繰り返し記されている。この短いエピソードで、7回も述べられている(2節、8節(2回)、9節(2回)、10節、11節)。これは、カインとアベルが兄弟であることが特に強調されていると受け取らせようとする書き方だが、あまりに頻繁に繰り返されているところを見ると、二人が兄弟でなくてもよいことを、無理にでも覆い隠そうとしているようにも思われる。

この問題は、アベル殺害が「兄弟殺し」でなければならないのかという問題にもつながっている。

<カインは「土を耕す者」、アベルは「羊を飼う者」>

この問題については既に上で検討した。カインは「土を耕す者」、アベルは「羊を飼う者」とされているのは本来的ではない、とみなすべきである。

カインは「土を耕す者」とされていることについては、後でさらに検討する。

<カイン、怒る（5b 節）>

カインとアベルについて、神によって肯定されるアベルと否定されるカインがいるという状況が生じた。この状況においてカインは、「怒る」「顔を伏せる」という反応をしたとされている。

捧げものの出来事の結果としてカインがこのような反応を示したことについての因果関係は、物語の流れの中で、ほとんど直感的に納得できてしまう。一見したところ同じような働きかけを神に対して行ったのに、アベルは肯定され、カインは否定されたからである。

カインが憤慨した理由は、言うまでもなく、ヤハウエがアベルの献げ物に「目を留め」ながら、彼とその献げ物には、「目を留めなかった」からである。（月本、p.145）

しかし「言うまでもなく」ということで、このような指摘をただけでは済まない問題が、カインの反応に含まれている。

「怒り」が生じるのは、望ましい状況が想定されていて、その実現が期待されているのに、その状況が実現しないからである。期待している現実と、実際の不満足な現実の間に、差がある。具体的に言うならば、カインも、アベルと同様に神に認められたなら、この差は生じない。したがって、「怒り」という反応が生じない、ことになる。

また、期待している現実と、実際の不満足な現実の間に挟まれることになっても、「怒り」という反応が必ず生じなければならないのではない。期待されている現実が実現しないのだが、「期待」の方向性が、期待していた者にまだ残っていて、それに引っ張られるから、平静でいられなくなる。このように平静でいられなくなる中で、「怒り」は、さまざまな対応があり得る中の一つの対応である。平静でいられなくなる状態を一般的に指すには、たとえば「不満」という語が使えるだろう。

「不満」が残っていても、それが「怒り」というべき激しい反応を生じさせるとは限らない。「怒り」は、「不満」の状況において生じる可能性のあるさまざまな対応のうちでかなり強い反応である。

「不満」という状況があっても、それが「怒り」になるとは限らない。それほどには激しいものではない対応にもさまざまな場合が考えられるが、たとえば「失望」というべき程度の対応になる、ということも考えられる。「失望」は当初の期待が消えることなので、「失望」であるだけなら、外面的には、平静であったりする。

「不満」であっても、内面的にでも平静を保つこともあり得る。期待があったけれども

期待通りの現実が生じなかったので、それに関わらないことにする、ということも可能である。「諦め」というべき反応である。

カインについて「顔を伏せる」という動作を行った、とされている。「顔を伏せる」という動作は、その意味が曖昧で、さまざまな場合が考えられてしまう。「諦め」の表現だと考えることもできる程である。しかし、そうでないかもしれない。「諦め」をはっきりと表現するような身体的反応があるならば、聖書的ではあるかどうかはともかく、たとえば「肩をすくめる」という身体的表現は、「諦め」の表現として容易に理解されるかもしれない。

カインは、肩をすくめて、その場を静かに立ち去り、その後、目立った事件は何も生じなかった。このような展開も可能である。しかし、そのようにはならなかったとされている。

「諦め」は、自分自身にとっての不満な現実、あるいは不満な現実を前にしている自分に、無関心になることである。

他にも、神に認められたアベルを祝福し共に喜ぼうとする、あるいは、何としても神に認められようとして次の機会を期する、等々、さまざまな可能性が対応としてあり得るだろう。

あらゆる可能性を網羅的に列挙することはできない。まだまだ様々な種類の対応があり得るだろうし、対応の程度もいろいろとあるだろう。単純な対応ばかりでなく、いろいろな対応が混じり合うことも考えられる。しかし、このように検討するだけでも、期待している現実と実際の不満足な現実の間に挟まれるということになったとしても、「怒り」という対応しかあり得ないことは十分に確認できただろう。

カインが憤慨したのは、献げものの出来事の様子が原因である。しかし、そのことを指摘するだけでは、重要な問題を素通りしてしまう。献げものの出来事から生じるような状況（神が、他人には好意的で、自分には好意的でないことが、具体的に示される）に置かれたとしても、さまざまな対応があり得る。そうしたさまざまな可能性があるのに、カインは、「怒る」という対応をした。その意味を検討しなければならない。

「怒り」は、様々な可能性がある中で、きわめて激しい反応である。自分の側にあった「期待」を、放棄していない。

カインは、自分自身の状況に強い関心を持ち、その状況に大きな不足があることをしっかりと認めて、その不足の問題が大きく改善されることに強い関心を持つ者である。

カインの反応がこうしたものになるためには、カインがこうした反応をし得るような人間でなければならない。誰でもこうした反応ができるのではない。能力がない者もいる。

カインについてまず確認すべきなのは、カインが「怒る」ことのできる人間だ、ということである。

< 「怒り」から「アベル殺害」へ（5b-8節） >

「怒り」は激しいものだが、感情の一つである。しかし「怒り」は、感情であることにとどまらず、行動に表現される可能性がかなり大きい。

「怒り」が生じて、その表現となる行動がすぐに行われる、ということがあり得る。

「怒り」が生じて、その表現となる行動が行われない、ということもあり得る。「怒り」を抑えてしまう、あるいは、「怒り」が行動に表現されないことを選ぶ、といった場合が考えられる。結局は「諦め」の状態になる、と言える場合である。

「怒り」が生じて、その表現となる行動がすぐに行われないが、結局は行動が行われる、ということもあり得る。「怒り」がその表現となる行動に結びつくのを、一時的に抑えていることになる。

カインの「怒り」は、アベル殺害に表現された。創世記のテキストによれば、「怒り」が生じてすぐにアベルを殺したのではない。

「怒った」とされた後、カインは「顔を伏せた」とされている（5b 節）。

それから神がカインに語った言葉が、記されている（6－7 節）。

次に、アベル殺害の様子が記されている（8 節）。

カインが顔を伏せて、神が語る、という部分は、元の物語にはなく、後からの挿入かもしれない。

1) 怒ったカインが、すぐにアベルを殺した、というようにテキストが続いても、物語の運びに問題がない。

2) カインが怒って、顔を伏せた（5b 節）、と記された後、カインへの神の言葉は、「なぜ怒るのか、なぜ顔を伏せるのか」という質問で始まっている。表現が繰り返されている。挿入部分を物語の流れの中にもうまくはめ込むために、「直前の表現の繰り返し」という単純な方法が採用されているのかもしれない。

3) 神の言葉は、カインのこれからの行動について、適切な選択がなされるような忠告になっている。カインのあり方をうまく理解するための、自己分析の手助けをしてるような内容になっている。神がこのような忠告をしてはならない、ということは全くない。しかし、神の言葉という形を借りて、この部分を挿入した者が、エピソードの解釈の手助けになる指摘をここでやっている、という雰囲気強い。

4) 7b 節は、3,16b の女に対する神の言葉と、似ている。

3,16b : אֱלֹהִים אֵינִי וְתַשׁוּקָתְךָ אֶחָד מִכָּל אֲשֶׁר-לֹא יִשְׁלַח

4,7b : אֱלֹהִים אֵינִי וְתַשׁוּקָתְךָ אֶתְּךָ תִּמְשָׁל-בָּהּ

3,16b そして、お前が求めるところは、お前の夫だ。そして彼は、お前を制するだろう。

4,7b そして、それが求めるところは、お前だ。そしてお前は、それを制さねばならない。

「カインとアベル」のエピソードを、「エデンの園」のエピソードに繋げようとした際に、3,16bの女に対する神の言葉と対句のような表現を、カインに対する神の言葉として配した可能性が大きい。

5) 6-7節の神の言葉が後の挿入だとしたら、5b節の「顔を伏せた」という描写も、その時に付加されたと考えられる。カインが怒って、ただちにアベルを殺してしまうと、神が忠告を述べる余裕がなくなる。また、アベル殺害についてのテキストに、場所が「野原」であるという叙述があるが(8節)、これもこの時の付加かもしれない。たとえば献げものに関しては、場所について何も述べられていないのに、アベル殺害についてだけ「野原」とされているのは、どことなく釣り合いが悪い。アベルを殺すのに、場所が「野原」である意味がよく分からず、議論がなされるばかりである。「野原」でない場所でアベルを殺すのに、何か不都合があるのだろうか。つまり「野原」の指摘は、とってつけたようである。物語の出来事が生じている場所については無関心だったのに、アベル殺害の場所について急に具体的な指摘をすると、少なくとも、献げものが行われたところとは別の場所だという印象を与えることができる。したがって、アベル殺害の場所はどこでもよかったのではないか。しかし場所についての何らかの具体的な指摘を記すことになって、ある意味でたまたま「野原」という場所だということにただけではないか。「顔を伏せた」という挿入が、「怒り」と「殺害」の間に時間的な幅を作る手段ならば、「野原」の指摘は、「怒り」と「殺害」の間に空間的な幅を作る手段になっていて、どちらも、神からの忠告がなされるための場面を作る工夫になっていると考えたくなる。

しかし、6-7節の神の言葉が後の挿入だと断定することもできない。挿入である可能性が大きいことを念頭に置きつつ、しかし本文にあったかもしれないという前提で検討する。この神の言葉は、カインのあり方についての理解に方向を与えようとするものになっている。適切な理解のあり方を発見するきっかけになっているかもしれないが、もしかしたら、理解を無用な方向に導いてしまうような指摘かもしれない。

こうした留保を確認した上で、6-7節の神の言葉について考察を試みる。

7節の神の言葉には、テキスト上の難しい問題がある。7節のテキストは「腐っている」(corrompu)かもしれない、もしかしたら元のテキスト通りでなく、間違いのテキスト(写本作成の際のコピーの誤りなど)が伝えられているのかもしれない、とされるほどである⁴。もっとも顕著な問題は、私の訳で「罪が構えている」とした部分である。「構えている」「待ち伏せている」は男性分詞「ローベツ」。ところが「罪」「ハッタート」は女性名詞。テキストの流れでは、主語は「罪」「ハッタート」であるのが自然だが、文法的には、「罪」「ハッタート」が「ローベツ」「構えている」「待ち伏せている」の主語であるのはおかしい。「ロ

⁴ W, Vogels, "Cain : l'être humain qui devient une non-personne (Gn4,1-16)", Nouvelle Revue Théologique, p.321-340, 1992, p.322.

一ベツ」の主語については、アベルではないかといった提案がある⁵。他にも、「蛇」という提案もある⁶。

「ローベツ」「構えている」「待ち伏せている」の主語は、確実には決定できない。したがって、この主語を、無理に決定しないで考えるしかない。

7節の言葉で少なくとも問題にされているのは、カインが「堂々としている」かどうかである。「顔を伏せた」という指摘がなされた直後に、このことが問題にされている。単純に考えるなら、カインは「堂々としていない」。しかし神は「カインが<堂々としている>かどうか」を問題にしているのだから、カインが顔を伏せているということがあっても、まだ「堂々としていない」ということにはならない場合があることになる。

「堂々としている」かどうかは、「良く行う」かどうかに対応している。「良く行う」と「堂々としている」は、結局のところ、ほぼ同じ意味である。「良く行う」のでないならば、何らかの問題（「罪」？）がこれからカインに生じる（「戸口で構えている」「(カインを)求める」）。

結論的に述べてしまうならば、「良く行う」「堂々としている」とは、「怒り」を適切な行動に表現することである。「良く行う」「堂々としている」ではない状態とは、「怒り」を適切に表現しない、「怒り」を抑えてしまう、といったことである。「顔を伏せた」は、「怒り」を抑えてしまうという方向を示唆してしまっている。しかし、結局のところカインは、「怒り」を適切に表現した、ということになる、と考えるべきだろう。

とすると、「良く行う」のでない場合の問題とは、「怒り」を抑えてしまったことによる問題である。「怒り」は自分の惨めさに起因する。惨めな自分を適切に変化させるのではなく、惨めなままの状態にとどまることが、この問題である。「お前は、それを制さねばならない」とは、「カイン自身が、この<惨めな自分>を制する、支配する」ことである。つまり「惨めさ」を抱えたままの自分になる、ということではないかと考えられる。

神がアベルだけに好意を示し、カインに好意を示さなかったことから、カインの怒りが生じた。そして彼の怒りは、カインによるアベル殺害に帰結する。したがって、怒りが行動に表現されない場合は、これ以上は考慮しないでよいだろう。

9節の神からの問いにカインが、アベルの居場所を知らないと答えている。カインが落ち着いた様子になっているので、カインの怒りはアベル殺害によって収まったと考えてよいだろう。カインの怒りは、アベル殺害によって解消するような怒りだった。

こうした様子を図に示した。

⁵ “The antecedent to the pron.suff. is usually taken to be Sin personified as a wild beast, or less commonly (Calv. al.) Abel, the object of Cain's envy.” (John Skinner, Genesis, International Critical Commentary, 1910, p.107).

⁶ W, Vogels, “Caïn : l'être humain qui devient une non-personne (Gn4,1-16)”, *Nouvelle Revue Théologique*, p. 321-340, 1992, p. 333.

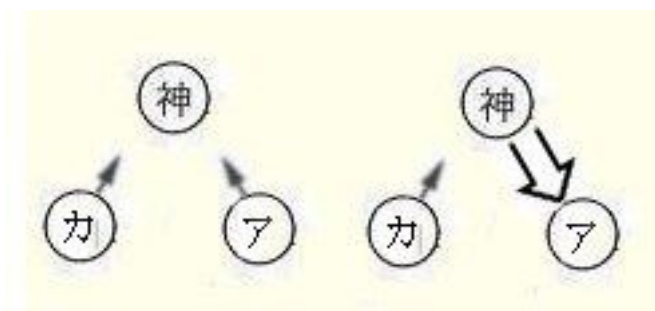


図 1

図 2

図 1 では、神に向ってカインとアベルが基本的に同様の働きかけを行っている。創世記のテキストでは、それぞれが献げものを行った。この働きかけは、神からの肯定的な反応が生じることを期待したものである。

一本線の矢印は、あてもなく行われる行為、やみくもの行為ではなく、自分の行為に相手からの相応の対応を期待した行為、何らかの客観的な論理に従った行為であることを示したものである。この場合なら、

「人からの働きかけ」 → 「神からの肯定的な反応」

という論理が前提されている。

この論理が前提とされているからこそ、カインとアベルの側からのそれぞれの働きかけが行われた。

図 2 は、神からの肯定的な反応がアベルについてだけ生じたことを示している。

神からの反応は、一見すると

「人からの働きかけ」 → 「神からの肯定的な反応」

という論理に従ったものであるかをのようである。特にアベルの観点からは、期待通りになったのだから、そのように思われだろう。しかし神のこの反応がこの論理に従ったものならば、カインの働きかけにも神からの肯定的な反応が生じるはずである。しかし、そのようにはなっていない。

神の反応は、人からの働きかけに応じたもののようだが、実はそうではない。一般的に述べるならば「何らかの客観的な論理に従った行為」ではない。したがって一本線の矢印で示すことはできない。

「何らかの客観的な論理に従った行為」でない行為は、やみくもな行為、勝手な行為、気まぐれな行為、などということができる。強いて言うならば「当事者（この場合は神）がそのようにすることにしたから、そのようにした」だけの行為である。

このような行為を、二本線の矢印で示すことにする。

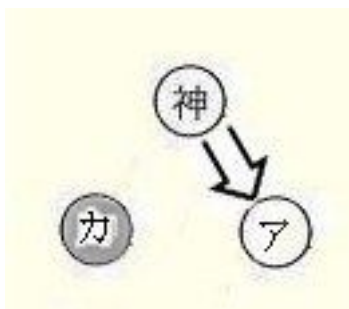


図3

図3は、図2の事態が生じた結果を示したものである。カインは「怒る」という状態に移行した。この怒りは、何らかの行為に表現される。怒りを解消させるような行為である。カインを示す丸枠内に灰色をほどこすことで、カインに新たな行為の可能性が生じたということを示した。

怒りを解消させる行為としては、客観的に適切だと思われるような何らかの特定の対象に対する行為もあり得るが、そうでない場合もあり得る。いわゆる「八つ当たり」といった場合があり得る。「怒りを持っていく先」がなくて、あるいは、「怒りを持っていく先」が適切でなく、客観的にしっかりとした論理に従ったものではない「怒りを持っていく先」が選ばれる場合、ということになるだろう。

カインの場合には、アベル殺害という具体的な対象のある行為に帰結しているので、この「八つ当たり」ではないと思われるかもしれない。

「八つ当たり」の場合について、さらに考えるべきである。

「八つ当たり」は、怒りを解消させる行為である。何かが、その行為の対象でなければならない。「八つ当たり」なので、その対象は、何でもよい。しかし何かが対象になる。「八つ当たり」の行為は、対象との関連では、「何らかの客観的な論理に従った行為」になっていない。対象に何らかの特定の状態や性質があって、それが怒り解消の行為の対象として条件を満たしているので、その対象に対して怒り解消の行為が行われる、といった行為になっていない。

したがって「八つ当たり」の行為は、それが実行されると、何らかの対象に対してなされるのだが、その対象との関連では「やみくもな行為、勝手な行為、気まぐれな行為」でしかない。

あえて言うならば「当事者がそのようにすることにしたから、そのようにした」だけの行為である。

対象の側から見ると、自分でなくても構わなかったのに、自分がたまたま「行為の対象」になってしまったことになる。「とんだ災難」とでも言うべき事態である

つまり「八つ当たり」の行為は、アベルだけに好意を示した神の行為に似ている。

「怒り」の状態からのカインの新たな行為は、具体的な対象のある行為になっている。

この行為は、何らかの客観的な論理にも従った行為なのか。我々の図で、一本線の矢印で示すべき行為なのだろうか。

それとも、「当事者がそのようにすることにしたから、そのようにした」だけの行為なのだろうか。我々の図で二本線の矢印で示すべき行為なのだろうか。

アベル殺害に帰結するカインの行為は、カインの怒りが直接の原因である。神によるえこひいきの出来事があったとしても、カインに怒りが生じないなら、アベル殺害は生じない。

怒りに続く行為は、怒りの解消を目的にしたものである。しかし、この行為の対象は、何であってもよいところがある。カインの怒りの場合についてならば、アベル殺害という行為でなくても、怒りが解消する可能性がある。怒りを解消する行為は、それが何らかの対象において実現されると、その対象でなければならなかったのではないということがあるために、気まぐれの行為であるような姿になってしまう。

つまりアベル殺害は、気まぐれの行為であるような面があって、神の行為の性質に似たものになっている。

この点が見過ごされていることが、あまりに多いようである。

アベル殺害の事実注目して、カインの行為がどうしてもアベル殺害でなければならなかったと考えると、その動機を詮索することになってしまう。そこで、カインにおけるアベルへの嫉妬が原因だと考えてしまう。また、カインとアベルが兄弟だとされているので、兄弟殺しの問題も念頭に浮かんでしまう。「カインとアベル」のエピソードについての二千年以上にわたる解釈は、こうした観点からの検討に終始していると言ってしまう程である。この観点から、さまざまな解釈が生じ、さまざまな思索がなされてきた。しかしこの観点からのアプローチは、「カインとアベル」のエピソードの解釈としては、もっとも重要な点が見過ごされたものになってしまっている。

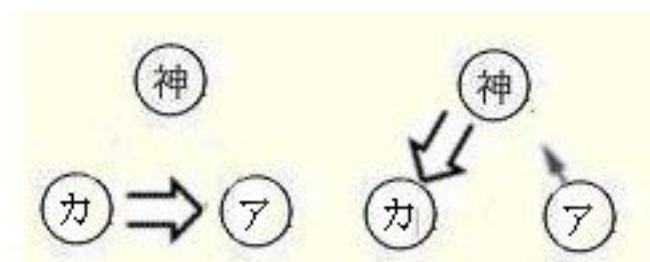


図4

図5

カインの行為は、怒りに起因するものなので、アベル殺害でなくてもよかった。アベル殺害がなされたのは、究極のところでは、カインの気まぐれである。

この点でカインは、神のようにふるまっている。

このことを示したのが図4である。カインからアベルへの働きかけ（アベル殺害）は、対象がアベルでなくてもよかったし、殺害でなくてもよかったのに、そのようになされた行為である。神が、当初、カインとアベルの二人に好意を示してもよかったし、二人のうちのどちらかだけに好意を示してもよかったし、二人のどちらにも好意を示さなくてもよかったのに、実際にはアベルだけに好意を示したという行為に似ている。そこで、二本線の矢印で示した。

図5は、この後、神がカインに示した好意の様子を示したものである。テキストの分析は、後で行うが、先取りしてここで示した。神は、当初は、カインに好意を示さなかったが、アベル殺害の後（また、アベル殺害の前の、神による忠告も考慮するならば、その忠告においても）カインに好意を示す。人間的な普通の論理からは、意外な行動である。したがって、これも二本線の矢印で示した。

図5で、アベルから神に向けられた一本線の矢印を示した。これは「アベルの血の叫び」である。しかし神は、アベルからのこの働きかけに応えない。神のこの対応も、気まぐれである。神からアベルへの矢印は、存在しない。

アベル殺害が、怒りを消滅させ得るさまざまな行為のうちで、かなり厳しいものであることは確かである。人が殺されている。この殺人には、嫉妬がからんでいると考えられる雰囲気濃厚である。また、創世記の物語の設定に従うなら、兄弟殺しの要素も加わる。しかし、殺人、嫉妬、兄弟殺しは、人間の中の出来事である。

アベル殺害には、これらとは別に、神との関連における重大な意味がある。神によって好意が示された者を、神に無視された者が殺している、という点である。人間でしかなく、また神との関係が神によって否定されたと思われる者が、神による選択を否定している、そのような行為になっているのではないだろうか。

この点においてカインは、神のようにふるまうといった程度ではなく、神に挑戦しているといえるほどである。

ところが神は、神と同等にふるまおうとする者、もしかしたら神に対し挑戦的である者を、退けない。むしろ好意的に接している。

8節でアベル殺害についての記述がなされてすぐ、9節で神は、「アベルはどこか」とカインに問うている。しかし神は、アベルの行方を知らないのではない。10節で神は、アベルの血が土の中にあると述べているので、アベルが死んでいること、そしておそらく、カインに殺されたことまでも、神はすでに知っていると考えられる。したがって9節での「アベルはどこか」という問いにおいて、アベルの行方を知っていることを神は隠して、あえてこうした問いをしていることになる。神は、知っているのに知らないふりをしている。10節冒頭の、「お前は何をしたのか」という神の問いにおいても、神は知っているのに知らないふりをしていると言えるだろう。ただ、この「お前は何をしたのか」は、カインの行

為について神が知っていることが文脈からかなり明らかなので、単なる質問でなく、レトリカルな問いかけであると考えられる雰囲気が、9節の神の言葉の場合よりも濃厚である。

この神の問いに対してカインは、「私は知らない」と返答をしている。カインがアベルを殺したことは直前の8節に記されているので、カインが神に嘘を言っていることは明らかである。しかも相手は神である。確言はできないが、カインの言明が嘘であることは、神には容易に知れると思われる。それなのにカインは、堂々と嘘を述べる。多くの解釈では、カインがいかにも悪玉であるかを指摘する機会になっている。

しかしカインが嘘を述べていることは、神によって、少なくとも明示的に非難されていない。

神とカインのこの問答で重要なのは、神が「知っているのに知らないふり」をしており、これに対してカインも「知っているのに知らないふり」をしている、という点である。ここでもカインは、神のようにふるまっている。

10節で神は、アベルが殺されたことを、対話の中で確認する。「アベルの血が土の中からわたしに叫んでいる」とされている。アベルの血が土の中にあるとされていることは、アベルが死んだこと、そして殺されたこと、を示すと考えてよいだろう。さらに神がカインを詰問している様子があるので、この叫びが、カインによるアベル殺害の証拠になっているとされていることも、認められてよいと思われる。それ以上にこの叫びの意味や内容を具体的に知るのは難しい。

この叫びが、このエピソードにおけるアベルから神への第二の働きかけであることは、重要である。アベルの第一の働きかけについて神は、肯定的態度を示した、この第二の働きかけについては、どうだろう。

この叫びが無視されているのではない。叫びは神に届いており、そのことを神が明示的に確認している。また、カインに対して処罰らしきものを神が行うので、この叫びに対してそれなりに肯定的な対応がなされていると考えることができる。

しかしアベルの最大の問題は、死んでいるということではないだろうか。そして神は神なのだから、アベルをよみがえらせることさえできるのではないだろうか。なのに神は、「アベルの血が土の中からわたしに叫んでいる」と確認するだけである。殺されたアベルをよみがえらせ、カインのところに連れてきて、「お前が殺したアベルはここにいる」といった場面も可能かと思われる。しかし神はそうにしない。アベルが殺される前、アベルが殺されないようにする、アベルを守るということを、神は行わなかった。アベルが殺された後も、アベルの叫びが届いていながら、神はアベルに目覚ましく肯定的な行為を行わない。死んだアベルは、死んだままに放っておかれたままである。

神は、アベルに好意を示したが、その後はアベルを見離したようになってしまっている。神の態度の変化は、「神がそのように態度を変化させたから、そのように変化した」とした言いようがない。

11-15 節に、カインの今後の位置付けについての、神とカインの対話が記されている。

カインには罰らしきものが与えられるが、軽いもので済み、他方、カインにはかなり手厚い保護が与えられる。

11-12 節の神の言葉で、カインは、第一に、「土から呪われる」とされている。12 節に、土を耕しても土はカインに力を与えない、とあるので、カインが耕作を行っても収穫が得られないという事態のことだと考えられる。収穫が得られないと食べ物が得られず、生きのびることができなくなるのではないかと考えてしまうが、そのような、事実上、死に定められるような事態、にはならないようである。

カインは、第二に、「地をさまよう」とされている。農耕を行うにはある程度以上は、定住が必要である。「地をさまよう」では、農耕はできない。農耕ができないとされていることと、「地をさまよう」ことは、うまく重なり合っている。また、農耕はできないが、「地をさまよう」ということは、生き延びることができるということを意味している。

13 節に、カインの返事が記されている。

1) 「罪（あるいは、罰）が耐えられない」⁷、2) 「地から追放される」、3) 「神の顔が隠れる」、4) 「地をさまよう」、5) 「殺される」—— こうした五つの事項が、述べられている。

2 番目の「地から追放される」は、神の言葉の「土から呪われる」「農耕ができない」に対応すると思われる。

4 番目の「地をさまよう」は、神の言葉の「地をさまよう」に対応する。

二点にわたる神の処置を、カインはそのまま受け入れるしかないようである。

しかしカインには、自分にとっての重大な問題が見えている。まずは「罪（あるいは、罰）が耐えられない」と抽象的な言い方で指摘されている。具体的には、カインが新しく加えた、3 番目の「神の顔が隠れる」および 5 番目の「殺される」という事態である。

「罪」は、基本的には、「神との間に断絶が生じていること」である。このことは、カインの言葉の 3 番目の事項「神の顔が隠れる」によく対応している。

その結果生じてしまう事態、カインにとって望ましくない事態がある。それが 5 番目の「殺される」である。

「神から離れると殺されてしまう」ということが、前提になっていると考えられる。

ちなみに、この前提が他の場合にもあてはまるならば、アベルが簡単に殺されてしまったのは、「神との間に断絶が生じた」「神の顔が隠れた」からだということになる。神は、アベルに好意を示したあと、気まぐれとしか言いようのない変化を生じさせ、アベルを見

⁷ 13 節の「アヴォン」は、「罪」とも訳せるし、「(罪に対する) 罰」とも訳せる。英語では、たとえば *iniquity, punishment for their iniquity* といった訳語が提案されている (<http://biblehub.com/hebrew/5771.htm>)。

捨てたことが、ここでも確認できる。

15 節の神の言葉は、「殺される」という問題を解決するものになっている。

カインは、神によって特別な保護がなされる者になる。神はカインにきわめて肯定的に介入したのだから、「神の顔が隠れる」という問題も、これで解消したと考えてよいだろう。「七倍の復讐」も、神が行使するとしか考えられない。将来においても、カインの保護を神が油断なく確保しようとしていることになる。カインが、特別な存在であることが他の者たちに分かるように「しるし」もほどこされる⁸。カインは普通の人間ではない。

16 節でカインは、「ヤーヴェの前を去った」とされている。直前に神とカインの肯定的な関係が確固としたものとして確立されたので、この「ヤーヴェの前を去った」は神との断絶を示す表現ではないと考えるべきである。カインが問題にしていた「神の顔が隠れる」は神との断絶を示す表現だが、ここでの「ヤーヴェの前を去った」は単なる空間的移動を示す表現だと考えるべきである。

結論

<神>

「カインとアベル」のエピソードにおいてまず重要なのは、神のふるまいの様子である。

神は、何らかの客観的な理由や原則とは関係なく、勝手に動いている。気まぐれである。恣意的 arbitrary ともいえる。フランス語には *bon plaisir* (ボンプレジール) という表現がある。「気まぐれ」「酔狂」などと訳されているが、まさにこの「ボンプレジール」で神は動いていると、あえて言うならば言うことができる。

ちなみに「ボンプレジール」は、フランスのフランソワ 1 世 (在位 1515-1547) が使った表現 "*Car tel est notre bon plaisir*" で特に有名である。王による命令書の末尾の決まり

⁸ この「しるし」がカインと他の人間を区別するもの、カインが特別な存在であることを示すものであるという以上には、それがどのようなもので、どんな性質のものかは分からない。W, Vogels, "Caïn : l'être humain qui devient une non-personne (Gn4,1-16)", *Nouvelle Revue Théologique*, p. 321-340, p. 337, note 40 に、ミドラッシュで想像されているさまざまな「しるし」が、簡潔に紹介されている。本論文では、不適切な解釈を紹介することは、きりがないので、最小限にとどめた。しかし、ここで、荒唐無稽な「解釈」がいろいろと提案されている実例として、Vogels が列挙している「しるし」の「解釈」を紹介する。「神は太陽を輝かせた、太陽の輝きは獣がカインを殺さないよう知らせるしるしである」「神はカインを leprosy の病いに罹らせた」「神はカインに犬を与えた、危険な獣が近づくと犬がそれを知らせる」「神はカインの額に角を生やした」「これから以後、殺人が起らないように、神は見せしめにカインを罰した」「神はカインを部分的に罰した、これは将来の罪人が悔い改めることを励ますためである」「神はカインを、大洪水の時までは生き延びさせた」。テキストから離れた勝手な想像が「解釈」になっている。

文句として、この表現を使った⁹。訳を試みるならば「我々のボンプレジールだからである」となる。「ボンプレジール」は「気まぐれ」だが、王の支配下にある者たちには、絶対的な強制力がある。王の命令は、何らかの客観的な理由や原則に従ったものではなく、王が「良い」と判断したから、命令になる。

そして「神の気まぐれ」は、「王の気まぐれ」以上のものである。

神はアベルに好意を示すが、彼を見捨て、殺されるままにする。

カインについては、当初は無視するが、その後は彼にいろいろとかなり好意的に介入する。結局は彼に、かなり手厚い保護を与える。神の行動には人間が了解できるような一貫した原則はない。

<カイン>

カインの様子も、重要である。彼が「神のようにふるまう者になった」ことに注目しなければならない。

神が、無根拠と思えるえこひいきの態度を示したことがきっかけである。そこで「怒り」が生じる。この「怒り」は嫉妬の怒りと解されることが多い。そのような面は否定しきれないかもしれない。しかし、「怒り」の理由として最も重要なのは、カインのその後の様子からもっとも順当なものとして考えるならば、「神の気まぐれで惨めな状態に置かれることになる自分自身への憐れみ」といったことである。気紛れに起因するとしか思えない現実に翻弄されるキマジメな自分についてのバカバカしさ」とも言えるかもしれない。短い言葉で言うなら「自己憐憫」だろうか。「自己憐憫」を感じるためには、惨めな自分が限定されていることを認識できる広い視野が必要である。カインには、この広い視野がある。

カインは、「怒り」が生じるタイプである。また、諦めるタイプの者ではない。カインは、自分も、神のように気まぐれに振る舞う。アベル殺害は、カインにおける神的気まぐれからの行動の結果に過ぎない。

神的気まぐれで振る舞うようになったカインを、神は否定しない。ただし、神そのものでなく人間でしかないカインには、解決できない問題がある。「殺される」という問題である。この問題について神は、カインに手厚い保護を与える。

カインには「(おそらく)嫉妬から人殺しをした」「兄弟殺しをした」という面がある。人間の普通の価値基準からは、カインは悪かもしれない。しかしこのエピソードでは、このような基準による善悪は問題にされていない。

カインは一貫して、堂々としている。神の前でも、神的気まぐれの態度を崩さない。

「カインは耕作者」「アベル殺害」「アベルの血の叫び」「農耕することがカインにできなくなる」、というテーマの連鎖が存在する。「(カインは)土から呪われる者」という厳しい表現も用いられている。しかし「耕作ができなくなること」はカインにとって、「不利なこ

⁹ たとえば、<http://www.publius-historicus.com/fr1.htm> を参考。

と」「罰」なのだろうか。カインが「罪（あるいは、罰）」として問題にしているのは、神と離れると殺されてしまう、ということではかない。「アベル・土」の関連のテーマは、「耕作をしない」という位置付けの人間を出現させるための、物語上の仕掛けに過ぎないように思われる。創世記のストーリーで、「エデンの園」のエピソードでは、耕作が苦しみのない調和的活動だったのが、苦しみを伴う活動になってしまった、とされている。それを受けて、「耕作」を巡るテーマが、創世記に並べられる際に、「カインとアベル」のエピソードに盛り込まれた可能性がある。

<アベル>

アベルには当初、神から好意が示される。しかし彼は、ほどなく殺されてしまう。

神が気まぐれで、アベルを見捨てたことが背景にある。

さらに、彼の血が土から叫んでも、アベルに対して実質的な対応を、神は行わない。

アベルは神の気まぐれに翻弄されるばかりの人物である。

アベルが「正しい」「義人」といった新約聖書の解釈は、まったくの的はずれである。

<生活の座 Sitz im Leben>

このエピソードは、ソロモン、あるいはソロモンに到る王制、を念頭において成立したと考えるのが、最も順当だろう。

王が君臨する、王が神のようにふるまっている。王の行動には兄弟殺しも含まれている。さらに、王および王支配の活動にかかわる者たちは、直接には農耕の作業に携わらないということ、こうしたことが正当化されている。そして彼らは、神による手厚い保護を与えられた者たちだと主張されている。

このエピソードを「原初史」のエピソードとして読むことには、かなりの無理がある。

創世記のストーリーの流れの中で、解決できないさまざまな問題が生じてしまう。それでも、あれこれとゴマカシながら、さまざまな「解釈」が提案されてきた。特にカインを「嫉妬によって兄弟殺しをした悪人」と決めつける解釈が多い¹⁰。「原初史」のエピソードであるという、こうした位置づけに沿った解釈は、的はずれである。

創世記のストーリーの流れでは、「カインとアベル」のエピソードが、「原初史」のエピソードであるかのように配置されていることは確かである。特に「エデンの園」のエピソードの後に生じた状況を語っているかのようなようである。

¹⁰ Amgela Y. Kom, "Cain and Abel in the light of envy: A study in the history of the interpretation of envy in Genesis 4.1-16", *Journal for the Study of the Pseudepigrapha* 12.1 (2001), p.65-84 ; John Byron, *Cain and Abel in text and tradition : Jewish and Christian interpretations of the first sibling rivalry*, Brill, 2011

このことによって、読者を二種類に分別する機能が生じることが重要である。

一方には、「原初史」のエピソードとして何としても解釈しようとする、キマジメな者たちが生じる。創世記におけるエピソードの並び順にあくまでもこだわる者たちである。しかし、これでは、創世記の文脈の中でこのエピソードをうまく理解する解釈が得られない。どこかにゴマカシのある解釈、不十分な解釈、の試みが繰り返されるばかりである。こうした観点にこだわる者たちは、いつまでも不満足で、そしてきちんとした理解ができていないことからの重圧に苦しむことになる。

一言述べておくが、不適切な解釈がなされても、そこから生じるさまざまな副産物が無価値だということにはならない。思想や倫理上の思索、芸術表現などに、さまざまな刺激が与えられてきたようである。しかしこうした現象は、テキストについてのできるだけ適切な解釈をさぐる本論文におけるようなアプローチにおいてでなく、テキストの影響ないしテキスト解釈の影響について考える分野で検討されるべきである。

他方に、このエピソードを基本的に独立したエピソードとして捉え、その意味を探る読者が生じる。展覧会での絵の並び順を重視することをやめて、一枚の絵の意味についてまず考える者たちである。

実際的には、「原初史」のエピソードとして捉えて理解しようとしても適切な理解が得られないことに気づいて、別の観点からエピソードに取り組むしかないと思知らされるといふ経路をたどることが多いだろう。

この観点からの解釈作業を進めるならば、「カインとアベル」のエピソードが「ソロモン王支配支持」の立場のエピソードであることが見えてくる。